

佳作

すれちがう君からはプリンの匂いがした

はるよ

子供からは、ハンバーグの匂いがする。

夕方家に帰るとき、地下鉄のプラットフォームなんかですれ違うと、懐かしいキッチンが思いだされて、ちよつと切なくなったりする。

女性からは、みずみずしい果実のにおい。それが具体的になんなのかはわかんないけど、糖を飽和寸前までとかした水でみたされた果汁の香りが、たちこめる。若くて健康な女ほど、甘いにおい。すると思う。

おじいちゃんからは、干した魚のような、肉のような、そんなにおい。太陽があずける香ばしさは、時が育てたんだろかな。痩せ型の彼ほど酸がすくない。

大抵のひとつとは、こんな風に分類ができる。けれどみんながみんなそうってわけでもなくて、にんじんの甘みを漂わせる女子供もいるし、シチューのようなじんわり温かさを思わせる女もいる。つまりさきほどあげたものたちはただの傾向ってことで、片付く。

ぼくと彼女が出会ったのは春ももう去ろうとしているある日だった。奈々美はふんわりボブで、綺麗系かかわい系かと言われれば後者で、手の細い、ぼくと同じ大学二年生。たまたまとつた授業が、ペアで意見を交換しあう作業を一回に三度はさせる意識高いのか単に先生がめんどくさいのかわかんない授業だったんだけど、そこで毎回組んでいたのが奈々美だった。ぼくらは油断してシラバスもろくに見ずにこの授業をとっていったクチで、友人を引き連れてくるとか、そもそもとらないとか、そういう手を考えずに授業名と備考欄だけをきとくに読んで受講していたのであった。

ぼくは早々にくじけそうだったが、奈々美がかわいかったのと、結構親しみやすかったのとで、授業が楽しみになっていたので、なんとか単位をとることができた。よくよく考えてみると、奈々美のおかげだった。

ぼくと彼女が別れたのは、春も目前のある日だった。

「匂いがするんだ」とぼくは奈々美に言っていた。子供からはハンバーグ、女性からは果実、年老いた男性からは……奈々美は興味深そうに聞いていた。奈々美は優しかった。こういう

変なこと言っても気持ち悪がったりしなかった。でもやっぱりそれがいけなかった。

奈々美は笑いながら、わたしはなんの匂い？ って聞いた。ぼくは返答に困った。

やがてぼくは、プリンの匂いだ。と答えた。ちよつと恥ずかしかつた。甘くて、柔らかくて、優しい匂い。彼女は笑顔で、やだあ、つて言つた。めっちゃめっちゃかわいかつた。ぼくは軽率なやろうだつた。

ぼくはプリンが好きだつた。お母さんが昔、よく作つてくれた。綺麗にできあがつたときももちろんおいしかつたけど、失敗したときのたまごの、水を大量に含んだぼそぼそ感も嫌いじゃなかつた。記憶の中のカラメルは優しい色をしていた。

でもやつぱりダメだつた。奈々美は優しかつた。だから、ぼくについて多分とても考えてくれたんだろう。ぼくが、他人とは違うことで悩んでいるかもと、コンプレックスを抱いているかもと、だからこんな淡々とした物言いをする青年に育つてしまったのかも。最後のは奈々美の前でかつつけたかつただけなんだけど。

ある日ぼくは、奈々美の部屋で映画を観ていた。奈々美と体育座りになって、アイアムレジェンドを観ていた。頭でつかち尻すばみな映画だな、という感想しか浮かばなかつた。さすがハリウッド。しかし観おわつたあと奈々美はなぜだか落ちこんでいた。

「わたし、ごめん。わたし」

そしてぼくに向かつてそう言うから、え？ と首をかしげた。「こういう映画って知らなかつた」

んん？ と考えこんだが、奈々美の涙を見てなるほどと思つた。

「世界にひとりきり、なんて。当てつけとかそういうんじゃない。知らなかつた。ごめん」

奈々美は、ぼくが類まれなるこの感性のせいで、ひとりつぼつちで戦っていると思つていた。奈々美は泣いた。映画の件で泣いているのではなく、映画を申し訳なく思つたというのはきつかけで、今まで色々考えたことが涙となって出てきたつて感じなのだろう。ぼくのためにそこまで悩んでくれたのかと奈々美が愛おしかつた。フォローしなくちゃ、ぼくは全然傷ついてないかいなよ、と思つたところで、彼女は顔を上げた。

「ごめんね、わたし、ダメな奴だ。別れよ」

彼女のその言葉が解読できないまま数日が過ぎ、三年の春が迫つた。あれから奈々美からの連絡はない。嘘、マジで別れた？ それを確認するのが恐くてこちらからは何も言えなかつた。

三年生になり、新学期初日の帰り。このところ続くもやもやを胸にしつかり抱きながら、プラットフォームで電車を待つていると、急いでいるふうな女の人が前を通つた。彼女はきちんと、柑橘系の匂いがした。

五月の中頃。ある日。ぼくはサークル活動のために、ある教

室にはやめに入っていた。ぐだぐだ課題の本を読んでいた。携帯を見るが、奈々美からはいつもどおり何の連絡もない。そろそろ死にそう。

活動まであと三十分をきつたところで、突然、前の扉ががらりと開いた。ゆっくり見あげてみると、うちのサークル員ではない、知らない青年が立っていた。

「あ、あの」

ぼくを見て戸惑っている様子だったので、教室を間違えたのかなと思ひ、ここはサークルに使うことを告げた。彼は目をおかぴらいた。

「あの、いえ、ぼくは、ぼくは……」

「け、見学したくて、あ、サークル……」

ああ、そういうわけか。もう五月も中頃だが、まあ別に、そんな人もいるだろう。わかりました、ときどきに座つてと指示を出した。

青年は少しほつとしたようで、教室の中に入ってきた。そしてぼくの前を通り、後ろの方の席を選んで座った。彼が椅子にこしかけた瞬間、ぼくは弾かれたように顔を上げた。今までに味わったことのない感情が、突如として胸を占拠したことに驚いたから。戸惑ったから。

それは奈々美に対するものとは、正反対の感情だった。好きの反対は無関心というし、最初は確かに無関心だった。でもこの感情は確かに、愛おしいという気持ちとは対極にあるものだった。

プリンの匂いがした。

髪もボサボサで、暗い色の服を着た、伏し目がちで、話す声も明瞭でなく、青白い顔の青年は、ふわふわしたプリンの黄色い、幸せの香りをまどっていたのだった。

活動開始まで十分をきると次々にサークル員が現れた。青年は黙つて座っていたが、部長が来ると、彼に話しかけた。ぼくもぼくも集まったしはじめようか、という運びになって、部長が彼をみんなに紹介した。

彼の名前は高田<sup>たかた</sup>だった。なんとはなしの、強い嫌悪感を、茫然として持て余したまま、ぼくはその日を過ごした。高田は終始おとなしかった。

家に帰って風呂に入りながら、どういふことかと考えた。いや、どういふことも何も、ないけど。ただ彼からはプリンの匂いがして、それは女神のような奈々美を思い出させて、でも当の彼自身は、ぼろいTシャツとねずみ色のパーカーを着た、うつむきがちで卑屈な目をした人間だった。それがなんだか、ぼくの神聖な思い出を汚すようで。これが気に入らなくて、猛烈に嫌気がさしたんだろう。爆発的な嫌悪の理由は、納得できた。彼はとんだとばつちり。ちよつと悪いなつて思った。全部ぼく

の勝手だった。でも、彼がこのままぼくの空間に入ってくるのはいやだなとも思った。

奈々美とぼくの学部は全然違った。学部が違えば使うエリアも違うから、学内で会うことはほとんどなくて、だからあの授業は本当に奇跡と言って差し支えなかった。ふと、食堂とか、学生がたくさんごったがえているところを見ると、彼女を探してしまふ。彼らの中をつきついて行くと、鼻孔の中で色々な匂いが混じりあうが、特に気にはしなかった。ぼくは慣れていた。その日もぼくは学食で、学生うどんを食べながらちらちらと横目で女学生の姿を追っていた。正直、奈々美の背格好はありふれたものだった。だから、全然関係ない子が横を通り過ぎただけでも、少しどきどきしてしまう。

そんなことが二、三回。飽きもせずにとキドキシ続いていたぼくは、やがて視界の隅に高田の姿を見つけた。

うわ、いる。

ふいと目を背ける。けれど、彼はこちらの方へ歩いてくるみたいだ。ぼくに何か用か、とも思ったけど、ぼくのことには素通りして、真後ろのテーブルを選び、座った。

気づかれなかったか、よかった。と安心したとたんに、強い風がふいたと思った。それは錯覚だった。つまり、彼の匂いだった。別段ほかの誰より近くにいてもないのに、それは強烈に、自己を主張するように、匂いをまきちらした。

ぼくは我慢した。ぬるいうどんを食べることに集中しよう

思った。対抗策として、目の前の丼に備えつけの七味をふりかけたけど、「七味ってななみって読めるな」って思ったら更に気が散った。うどんは炎の辛さを手にいれた。

そんなわけだから次のサークル活動は、地獄だった。高田はまた姿を現した。奴が教室に入ってくるときに目が合って、別に何も言わなくてもよかったとは思うけど、微妙なる罪悪感みたいなものから、「こんばんは」とあいさつしてしまつた。俯いて肩かけ鞆の持ち手を握っていた高田はぼつと顔を上げて、一重の目でぼくを見た。「こ、こん……ばんは」

その日のサークルは、高田が入部の意を示したことから、見学だった前回とは違い、高田に何回かスポットライトが当たつた。なんだか全体として彼に興味を示すみたいいな空気だったの、ぼくもいやいやながら彼とかかわつた。

「高田さんは何の映画が好き？」

「え、映画……じゃんで……？ あ……くしよん、アクションものとか……です、ケド……へ、へえへ」

高田はコミュ障だった。

回を重ねていくにつれ、ぼくの気持ちはおさまるところか、どんどん加速していった。ぼくはどうにかなりそうだった。一回サークルに出れば、高田の存在が目についた。その度、ろくに人の目を見て話せない高田に腹が立った。女子と話すときは

微妙に距離をとる高田に腹が立った。いつも同じ服な気がする高田に腹が立った。

とどのつまり、高田がプリンの匂いを漂わせる限り、ぼくは彼が気に食わなかった。

まわりのサークル員は、しかしそんな高田に優しかった。彼らは、高田の身なりや口調を笑ったりせず、話題をなげかけ、高田と積極的に交わった。よい人たちだった。でも、それはぼくの苛立ちをつのらせる結果となった。ぼくはこれがどういうことだかわきまえていたつもりだった。ぼくが私的な、限りなく私的な理由で彼を嫌っているだけだと理解していた。でも、どうしても、駄目だった。高田が何かをすれば、言えば、見れば、奈々美の影がちらついて、「なんでだよ」と言いたくなった。高田が笑うと、別れよ、と泣きながら言った彼女の顔が思いうかんで、「笑ってんじゃねえ」と思った。風呂掃除をしていて、排水溝の臭いをすいこんだとき、「高田こういうのいいよ」って思った。懇願であった。

季節は夏に入ろうとしていた。七月上旬、まだTシャツ一枚になるには早い時期。授業が終わって、外を歩いているときだった。

ずいぶん日ものびたと思って、大学の池を眺めながら、サークルに行こうと、活動する教室のある建物に向かっていった。何人かの学生が、自転車で脇を通り過ぎていく。そのながい影をじっと見て、ふと顔を上げると、それは視界に入ってきた。

高田。

彼は前方五メートル、僕の行く手を左から右に横切ろうという最中だった。……サークルに行こうとしているんだ。建物への道は何通りかあった。

気づいていないふりをして通りすぎよう、と下を向いた途端「あの」声をかけられた。

「こ、こんばんは」

高田は最初の「こ」でこちらを見て、次の「こ」で下を向いた。

「……こんばんは」

高田は「へえ」と言った。口元はゆがんでいた。愛想笑いのつもりだろうか。高田はそのまま続けて声を出す。「あのう」

ぼくはサークルでは、別に高田と話す方ではなかった。この気持ちは周囲には隠していたし、当たり障りなく接している自分では思っていたけど、決して仲がいいわけではなかった。

「あ……」

高田は何かを言いたそうだった。ぼくは彼の影に目を落としたり。別に何も言うべきことはないだろうに。無理に話題づくりしなくていいよと思った。

「サークル、行くけど」

「あ、はい」

振りきりたくて、急いでいる風に歩き出したけど、奴はなんか勘違いしたのか、ついてきた。

わあ……。

「あ、あ」

彼はぼくにつきまといながら何か声を出す。亡霊かよ。

あきらめず話題を振ろうとしているようだったが、聞いてやるのも癪だったので、ぼくはずいっと彼を遮った。

「あのみ」

「や、は」

「高田って、甘いもの好き」

口を開いて、とっさに出てきたのがそれだった。自分でも驚いた。ふっと目を伏せる。「……プリンとか」

「えっ」

高田も脈絡のない質問にびっくりして、慌てているようだった。足をせわしなく動かしながら俯いた。そして、少し黙りこんだあと。

「……どちらかと、いえば、嫌い」

ぼつとぼくは振りかえった。高田は目をかっぴらいた。甘い匂いが風に流れている。

「あっそっ」

淡々とそう言って、くると進行方向を変える。

「え……あ……」

「おれ、用あるから今日サボるわ」

早足をさらに加速させて。吐きすてるようだったなって思ったのは、大学の敷地を出て、自分の車にのりこんだときだった。深呼吸をひとつ。

部屋に入って、電気をつける。きれいな電球を見あげて、あ、そういえばサボるって手は今まで思いつかなかったな。なぜだろう。

サークルに入ったこと自体、友人が入るついでみたいなものだった。休まないからといって義務感とか熱意があったわけではなく。ただ面倒とは思ってなかった。強制ではなく、苦痛でもない、丁度よい気持ちの落ち着きで行ける場所だったから、よかったのかもしれない。

布団に寝そべりながら考える。あれ以上高田といえることが耐えきれなくて、帰ってきたけれど、それは高田のアンサーが間違いだっただけじゃないなあ、きつと。高田が好きって言ったら言ったで別の形で耐えきれなくなつてあいつのこめかみとかブン殴っていたのかもしれない。間違っていたのは、ぼくの質問だ。

体を起こして、テレビのリモコンに触れる。ちらりと時計を見ると、まだサークルは始まったばかりの時間だった。テレビから笑い声が漏れる。バラエティ番組独特の席の並びがうつった。あどけない顔した、清楚さが売りの若い女優の隣に、今をときめく芸人が二人。ななめ後ろに古株の芸人。間を埋めるように、中堅の芸能人。

有名人って、どんな匂いがするんだろうか。そういえば、誰にも会ったことがない。誰かのファンになったこともないし、彼らの出向くイベントに足を運んだこともない。やはり、なん

か特別な感じがするのだろうか？ しかし別に、この感覚は、凡非凡を見わけける装置でもない。他人と少し違うだけで、聖なる力でも特長でもない。

スマホがぶぶつと鳴った。サークル員の一人からLINE通知が来ていた。「今日やすみ？」

「うん」と返事をした。

「あーい」

「あ、今さ、やまちーが」

「やべー」

「ウケる」

どうでもいいって感じの返事のあと、どうでもいい報告がどうでもいいところで区切られて送られてくる。状況説明が全くなくて、何がウケるのか全然わからない。ツッコむ気分にもならなかったから、ぼうつと画面を眺めるだけにしておく。既読って文字が相手の目に触れるだろうが、それで返事の役目を果たすと思うし。

「あ、あと」

懲りずにメッセージは送られてきた。テレビはグルメ特集をしている。ぜつぴんすいーつだいけんきゅう。

「たかやすがもうすぐ誕生日じゃん。で、聞いたら高田くんも近いっぼくてさ」

「誕生日やる」

「やわ」

なんともいえない気分になった。なんとしても欠席しようと

思った。もう高田の前で嘘の表情を作ることは無理そうだった。「たかにはいつも通りアレな。んで高田くんのたんぷれ、何がいいかなー」

自分勝手なタイミングで送られてくるメッセージに、シカトを決めこみたかった。もう今日は容量いっぱいだった。でも絶品お菓子の映像をじっと見ていると、じわじわと腹が立ってきて、やがてぼくは「プリンひゃっこ」と返した。

三日後、誕生日のお知らせがメールで回ってきた。「用事があるので欠席します」と送って、ふうとため息をつく。その流れでなんとなく、さらさらと携帯画面をいじる。慣れた手つきで無意識にタップしたのは、Eメール画面だった。奈々美からは二月末を最後に連絡は途絶えたまま。またいらないことを、確認してしまった。

「これが傷心つてやつか」と気づいたのはそれからまた数日後、奈々美と別れてから四か月も後のことだった。昼食の学生うどんの麺が凍りかたまっていて、「まるでぼくの心のようだよ……」とか思いながらほぐしていたら、その考えに至った。「ぼくはもしかして、かなり傷ついているんじゃないか」と。きつとその通りだった。いや、思い返せば当然なんだけど。なんとというか自覚がなかった。別れた、なんで、とは思っていたけれど、そんな自分を客観的に見て「よし回復に向けて何かしよう」とは思わなかった。奈々美のことに対する、自分の気持ち、そ

佳作『すれちがう君からはプリンの匂いがした』

してその原因を、なんとかしようとは思わなかった。気持ちを整理する時間もなく、高田が現れたから。

「どうすればいいんだろう。」と思った。うどんをほぐす手を止めて、ぼくは一回、目を閉じた。

ぼくは、奈々美と別れたことを信じられないでいる。

ぼくは、奈々美に未練を感じている。

ぼくは、なんとか、この件について解決をしたい。

ざっとこんなところだろうか。では何をすればいいか、という、答えは一つしかなさそうだった。

ぼくはスマホを取り出した。震える手で、もう一度Eメール画面を開いた。そして奈々美からの最後のメール「じゃあ夜しちじうち集合で！」を開き、返信ボタンを押す。キーボードを展開させて、文字を打つ……。

「ぼくの人さし指が触れるかどうかというところで、ふうふうと携帯が震えた。驚いた。」

高田からだった。メールだった。なんで、と目を丸くしたが、そういえばぼくらはサークルのメーリングリストに登録していたから、互いの連絡先は知ろうと思えば知ることができた。糞みてーなシステムだ。

水を差されたこと、決心をくじかれたことで、猛烈ないらつきを感じながらメールを開く。

「芳村さん、こんにちは。高田です。突然申し訳ありません。少しお話ししたいことがあるのですが、お時間いただけません。」

「しょうか。できたらサークルの前など、いかがでしょうか。高田」

「なんだかしこまって。と思ったが、高田は特別かしこまってるわけではなく、いつも不明瞭な声で話すから、メールの淡々とした、整理された文面は違和感があるだけなのだと思った。」

「ぼくは少し考えて、「なんだよ、用件を言えよ」って打ったけど、すぐに消して、「わかりました。」と送信した。」

水を差されたと思ったが、むしろ、ちょうどいい。こちらから片してしまおう、と思った。なんの用だかしらねえが、うけてたとうじゃねえか。

小さいころ、よく遊んでくれた近所のねえちゃんは、ゴムの匂いがした。本人に言ったら、泣かれた。その事実はぼくが年上の女の子をからかったということになってしまっただけで、子供ながらなんだかなあって思ったものだった。

時がたち、あっこれ普通じゃないんだって気づいたぼくは、小四くらいで何も言わなくなったから、子供の頃のぼくの言動を知るものは、それらを小さいころの不思議な感受性で片づけている。近所のねえちゃんは看護師になった。今でもゴムの匂いがする。

そんな中、奈々美はぼくを受け入れた。ぼくはそれが嬉しかった。今回のことは、その中で少し行き違いがあっただけだった。氷のうどんをかっこむ。ぼくは幸せになりたいんだと思う。



夕方六時の教室はまだ明るい。電気なしでもじゆうぶんいけるな。目当ての場所につき中に入ると、すでに高田はいた。右側の前の方に、ちぢこまって座っていた。

「んむ」

声をかけると、ガタッと大きな音が鳴った。高田があわてて机をけとばしたからだ。ぼくは真顔でそれを見つめた。

「用は何」

ぼくの方に向きなおって直立した高田は、そんなぼくを見て目をそらしたが、口の中で何かもごもごと言った後、ゆっくり視線を戻した。

「あの、あ」

「話が」

高田は彼が座っていた隣の席を何やらごそごそしはじめた。見ると、でかいずた袋みたいなの……緊急用持ち出し袋？がぼっこぼっこ膨らんでいる。

高田はそれを持ち上げた。袋の下部にある、名前と住所の欄に、「高田クンへ♡」と書いてあるのが見えた。ぼこぼここのせいで文字はゆがんでいたが。

「あの、袋、これ」

高田は紐で閉ざされた袋を開ける。片手と胸で支える形だったけど、バランスを崩した。袋が落ちる。

「あっ」

中途半端に開いた口からぼろぼろとこぼれたのは、プリンだった。明治、メイトー、グリコなどの銘柄……全部スーパ―

とかコンビニで見かけるやつだけど……のさまざまなプリン。五、六個床に転がりくるくるとまわったが、袋のぼこぼこは全く解消されていない。

「……何これ。何個あんの」

「あ、ひゃ、ひゃっこです」

あーっと思った。採用されちゃったんだあれ。

ぼくの表情の変化に、高田はプリンを拾い集める手を止めて、口を開いた。

「なぜ、あの、ふれ」

「あ？」

言いたいことはうすうすわかってはいたけど、いつもの調子で言葉をつむぐ高田にいらいらして、意地の悪い声を出した。高田はぼくの悪意にギョッと目をつむった。急かされたことにも反応して、大きな声が出る。

「ふれ、ぜんと！ あの、芳村さんが、い、言ったって、言われて」

話の趣旨は大体つかめた。あの日、彼が嫌いって言ったのに、ぼくはプレゼントとしてプリンひゃっこを提案して、実際それが彼の手に渡った。

これがどういうことなのか、ということなんだろう。

「あの、だから。だか、ら……」

どう責められるのかと思って見ていたら、高田は右下、左下を交互に見ながら、背中を丸めた。そしてそのまま、頭を下げる。

「あ、あ、ありがとうございます、あ。ありがとうございます」

「えっと。あの……ぼ、ぼく、でも、プリン、嫌いで」「知ってるよ」

「アッ、で、です、よね、この前、聞かれたし」

怪訝な顔をする。高田はぼくの顔を見て焦ったように顔を上げた。

「あ、ぼ、ぼく、そ、その……高校、と、登校拒否で」

話がびゅんと飛んだ。あ、ああ？ 二つ目の豆鉄砲に、ぼくは反応できない。悪意をさしこむ暇もない。

「で、じゅうはち……になっても、何もして、なくて……にねん、浪人して、だ、大学に……あ、理由は、いじめでした……」

もたもたと話すかと思ったら急に早口になる。肩掛けかばんを机にぼしっとおいた。

「だ、から、あんま、人と……同年代の人のこと、わ、わかんなくて、話してることか、はやりとか、よく……えっと……」

高田は耳まで真っ赤だった。手先は若干震えていた。

「これは、意味、どういう、そういう、はやりとか、ですか？ プリンの意味って……嫌いって言ったから……？ い、いじり……？ わかんなくて、その、はずかしい、けど……」

「わかんないと……よ、芳村さんは……大学、入って、はじめて……まともに声を……かけてくれて、あいさつも、してくれ  
たし、意味……わかんないままは、やだなって……」

うつむいて、今度は黙ってプリンを片づけはじめた高田を、少し眺めた。そして、しゃがんでいる彼に近づく。どれも封は

あいていないのに、あまい卵の匂いがふわつと香った。「あ……っ」

ぼくは驚いたように見上げてくる高田を無視して、その中の一つを手にとった。ラベル、成分表をぐるっと眺める。そして、やがて、言葉は出た。

「食えよ」

「え、あ？」

「これを食べ」

手の中のしあわせ色を、高田の胸におしつけた。外側のへりが食いこんだように、高田は顔をゆがませた。

「え、なん、なんで……」

「食えつつってんだよ」

その言葉にびくりとして、高田は持っていたものをすべて落とし、ぼくのおしつけたひとつを握った。指はやはり震えていた。

そして、それを机の上に置く。睨むぼくにおびえながら。彼はゆっくり、プリンの封をあけた。そして何かを急に思いついたようできよろきよろする。

「手で食えよ」

スパーとかでよくもらえる、プラスチックのスプーンがずた袋に入っているのかわからなかったけど。「……あ」

彼はうなだれて、やがて人差し指をつっこんだ。

突然の侵入者、天からまっすぐ地をついた。しんびの黄色がカラメルに犯される。しあわせが、汚い爪にかきまぜられる。

それを見て、ぼくはゆっくり口を開いた。

「いじめだよ」

なんでわかんないんだと思った。今までお前はさんざんいじめられてきたんだろ。人の悪意は知ってるだろう。気に入らないから、排除したい。その気持ちが形をとった結果だよ。

「え、あ……あ」

「はやく」

何かを言いかけた高田に、顎でしゃくってプリンを示す。

高田は何も反抗することなく、しあわせの蹂躪をつづけて、やがて、小さなかけらを、三本の指でつまんだ。

ぼくは高田を見る。高田は、目をつぶって、指ごと口の中につっこんだ。

咀嚼なんてないも同然で、二、三回頬をもごもごさせたと思ったら、高田は飲みこんだ。

ぼくはじつと高田を見る。そして、二口め。しあわせと一つになつていく高田を見る。しあわせ。しあわせの色。そのときは、あの甘い味がぼくらしあわせでありつづけてくれると思つた。しあわせを維持するために、必要な嘘だつたと、判断した。三口め。

「あ、あ、の」

高田は声を出した。耐えきれなくなったのかと思つて彼を見る。

高田は困つたような顔をしていた。が、やがて、き、とぼくを見た。

「あ、あ、あの」

「何」

その目を睨み返して、ぼくは言う。高田は、ふうーっと息をつき、ぼくから目をそらさない。

「こ、これは、い、いじめじゃ、ない」

「なんで」

「いじめる方は、そんな、顔しません、から」

言われた瞬間、ぼくは目をそらした。

「だ、だから、これは……」

「や、やつあたり……?」

最後、あの気味悪い愛想笑いを口元にひっかけて、高田は言つた。

ゲームオーバーだった。突然、ぎゃああと叫びたくなつた。

ぼくは敗北した。

奈々美は、オレンジとレモンがないまぜになつたような爽やかな匂いがした。甘さがほんのり色づく、果実の匂い。つまり、ほかと何も変わらなかつた。

「わたしはなんの匂い?」

奈々美が笑顔で聞いてきたとき、ぼくは嘘をついた。なぜ。

なぜかという。彼女は特別なのに、特別じゃないのが、嫌だった。言いにくかった。

ぼくは高田の手前を睨みつけながら、醜い嗚咽をこらえた。この感性で得たことは、今までない。別にその人の好きなものの匂いでも、その人に関係するものの匂いでもないから。それを知っていたのに。かつこつけたかったのか、この感性を持つ者としての特別を求められていると感じてしまったからか。……奈々美が別れよって言ったのは、たぶん、最後の理由だった。

高田は手ですくってプリンを食べる。

奈々美はぼくとの付き合いに真剣だった。そして、きよらかすぎた。

だから、一点の、「思い上がり」も許さなかった。

ぼくはただ、しあわせであれと、祈りたかっただけだった。

高田は相変わらず三本指でプリンを運んでいる。

何回めだったろう。次のかけらを求めようとして、口からはいでた指が唾液をひいていた。

きつたね。

少しだけ口角が上がったのを契機に、信じられないくらい熱いものが喉を駆けのぼってくるのを感じて、ぼくは机につつぷした。

やがて、とてもきつたない声が腕からあふれ落ちた。